

随想

幸せの条件について

(株)P P Q C 研究所 加藤 宏光

最近 YouTube により情報や知識を得ることが多い。最新ニュースや各種のエンターテインメント等、あらゆるとも言える情報が YouTube によつて欲しい時に得られるのは、凄い時代を実感する。要件の一つである。

最近毎朝運転しながら聞いてる YouTube の番組に《OK! CozyUP》というのがある。日本放送のラジオ番組を再構成したモノであり、オリジナルは午前六時半から八時まで報道されている。著者はもっぱら YouTube で聞いているので、ダイジェスト版となっているようである。

土曜日にはその週のニュース等の番組で取り上げた情報をまとめて番外編として報道している。十二月十七日(土曜日)の報道で、興味深いテーマが取り上げられていた。ジャーナリスト峰村健司氏と公益日本モラロジー財

団法人・教授、麗澤大学特任教授である高橋史郎氏の対談で《幸せとは何か》というテーマでの語り合いである。

現代の国際世相で、Well Being あるいは自己肯定感についてよく語られるそうであるが、峰村氏がこのポイントを取り上げ、高橋氏に意見を求めていた。

高橋氏のいわく、江戸時代末期のこと書いた渡邊京二(注)の書物に、日本人は世界でもっとも幸せであると感じさせる民族であった。それは幼児の笑顔に顕われている。当時の幼児たちは社会で共同養育されていた。親・兄弟のみならず近所様にも大事に育てられていた。それが幼児の幸せな笑顔となり、その幸せが大人に波及して社会全体が幸せであることを感じさせた、と幕末当時に来訪していた外国人が印象として語っている。

一方、現代社会では孤立した家族が個別に養育している。加えて、父親は仕事に人生を奪われ、母親は仕事と養育を両立させるために必死である。子供に昔のような笑顔がないのはそうした世相に拠るモノであろう。

現在の一五才の子供たちの孤独感を各国で比較するとき、日本では三〇%にも上る子供たちが孤独であるという。これは世界で断トツ一位である。また、身体的健康度は世界で一位であるが、心の健康度では三七位で下から二番目である、という。

このような傾向は大きな社会の問題であり、経済発展を主眼としてひたすら走り続けた日本社会では国全体における幸福度指数は低くなっている。ちなみにアフリカで世界一位の国があり、その要因を分析すると、社会における人と人の繋がり度合いが

高いことであることが分かる。わが国を比較すれば、核家族が時代に趨勢でご近所付き合いも希薄である。宮沢賢治も《人とひとの繋がりこそ幸せの原点》といっているように江戸時代の人と人の繋がりがあったことが、幸せ度合いが高かった要因であろう。

近頃 SDGs や Well Being 等と言われているが、社会とは文化が土台であり、文化が醸成した社会があつて、SDGs・Well Being も成り立つことをわすれているのではないかと。実際、高橋氏の教室でも、結婚思考のない男性が四〇%にのぼる。両親の人生を見て、結婚と家族の生活に幸せを感じないことが、自身の結婚思考を妨げているのであろう。年収一、〇〇〇万円以上の所得で、不幸を感じているヒトの多くは人間関係が不良であるというデータもある。一方で、

一〇〇才近いお年寄りほとんどで幸せ感が強い。有名なクラーク博士の『少年よ、大志を抱け』という言葉には知られていないがその後がある。『この老いたる私のように』というのである。老人が幸せであれば、周りも幸せとなる。老人が幸せと思える社会を構築することが重要である。幸福になるための条件として、①ポジティブであること、②没頭できる何かをもっていること、③人間関係が良好であること、④人生の意味が明確であること、⑤目的達成のため努力を続けること(幸福学の第一人者・モリグマン?)。慶応大学の前野教授は、①やつてみよう、②ありがたう、③何とかなる、④人間らしく、⑤の四テーマを挙げている。

以上が対談の要旨である。耳ざわりが良いため、つい聞き流し、受け入れてしまう会談であるが、全体を書き下ろしてみると幾つかの問題点や矛盾点が気づかれる。しかし、幸せである社会や幸せを目指す社会に異論はない。

確かに、核家族化している社会は毎日の生活では楽である。複数世代が同居する多数家族は若い世代が遠慮するのが当然と

なり、遠慮している若い世代の《遠慮》を年老いた世代が《不十分》と感じる、という矛盾があり我慢にキリがなくなることもある。

それ故に、個人が自己を主張したい、また(人権として)できるようなった現代では、核家族化が限界まで進んでいる。そのようにして求められたために、生まれた核家族が招く孤独感が幸せを奪う、とボヤいても自業自得ではないか!?とも思えてしまう。

かつて、本シリーズで幸福指数について述べたことがある。ブータン王国の国王夫妻が訪日された折であつたと記憶している。

かの国(ブータン)は世界で最も幸せ指数が高い国として知られていた。その国で、車や電化製品あるいはテレビ・コンピューターが普及するにしがたがって、若い世代で《物質充足欲》が高まってきた、という記事を読んだことがある(現状どうなのかは寡聞にして知らない)。確かに、物質文明が広がっていない社会に接すると、大人も子供も幸せな笑顔を見せてくれる。著者の経験で言えば、フィリピンの下町に住む子供たちの笑顔がそうであり、

その親たちの笑顔もそうである。

今を遡ること一〇年、フィリピン大学への集中講義に際して下町の小学校を訪れた。そこは最貧ではないが豊でもない層の人々が住むエリアであつた。フィリピンでは英語で学ぶことが主流であるため、小学二年生ではかなりの英語を喋る子供が多数いる。そうした環境にある小学校の低学年生徒のクラスを訪ねたのである(教室が不足のため、二部制で低学年・高学年の授業を行っていた)。

子供たちの顔はそれこそ幸せ度合い満点のモノであり、シャイな子供、活発な子供それぞれがそれぞれなりに、著者に接触してくる。また、たまたま同席した親たちも、子供たちに劣らない幸せな顔で相対してくれた。

こうした子供たちが大学生となり大人となつて、かの国の国際的立ち位置を実感するようになつたときに、子供の時と同じ《幸せな顔》をしているのか、その幸せ度合いはNIHON以上であるのか?!対談を原稿として書き下ろし、問題点はシンプルに納得できない複雑性を内包すると思つた。《幸せをどう定義すべきか》を併せて考えねば答えは簡

単にはでない、と改めて感じる。

(注) 渡邊京二:一九三〇年八月一日に京都で生まれた作家・思想家である。日活映画の活動弁士であつた父をもち、一九三八年に中国の映画館で支配人をしていた父を追つて北京へ、その後は大連へ移り一九四七年に日本へ引き上げる。戦後は母の実家のある熊本に住む。一九四八年に旧制熊本中学校に通い日本共産党入党、同年第五後口に入學、一九四九年に結核を患つて一九五三年まで療養所で過ごすことになる。一九五六年にハンガリー事件で共産主義運動に絶望して離党。法政大学社会学部卒業後日本読書新聞編集者、河合塾後肢を経て二〇一〇年に熊本大学大学院社会文化科学研究科客員教授に就いた。近世から近代前夜にかけてを主題とし、幕末維新に訪日した外国人の滞在記を題材として、江戸時代を滅亡させた要因としての明治維新を特異な文明として取り上げた《逝きし世の面影》を公表(Wikipedia から抜粋)。高橋氏はこの書物を取り上げている。